若越郷土研究　五十五巻一号

‘The Recent Revolutions in Japan’再考（後編）

山下英一

米国人グリフィス（1843－1928）は福井藩の藩校明新館の教師であった。その１８７１年を評して、岩倉使節団の派遣が一番の事件で奇抜な大手柄であったと30年ほど経ってから自著“Verbeck of Japan”（フルベッキ伝、１９００）のなかで書いている。使節団のことについては米欧諸国の視察、久米邦武の報告（１８７８）など知られていると（前編）で述べたが、この行事の発案者で企画者は和蘭人フルベッキ（1830－1898）であった。このことを伝記が謳っている。第13章 The Great Embassy to Christendom に入っているフルベッキとこの出来事に関する表現に誇張はないという。

グリフィスは公私ともにフルベッキの世話になった。グリフィスが福井藩と契約を結び、廃藩になって明治政府と契約することになる。グリフィスの日本における生活の保証人のようなフルベッキにグリフィスの尊敬の気持は大きい。その頃、江戸（といつまでもノスタルジー好みであった）のフルベッキは大学南校で校長の職にあった。多忙を極める生活の中にあって計画中のポリテクニック・スクールの理化学教授にグリフィスを必要とした。要件のみ伝えて相手に否と言わせないフルベッキの一通がある。グリフィスへの数少ない手紙の中のその一通の速達は、江戸へ必ず行くとの返事を速達で強く求めていた。（1871.12.21）

福井の生活は物心ともに恵まれていたにもかかわらず、半年以上たって同じ国語を話す人、東京や横浜に建つ教会の牧師の皆無な暮らしの中にいた。これまでにない孤独に苦しむようになっていた。岩倉使節団の船が横浜港をサンフランシスコに向かって出航する二日前であった。団長に大隈重信（1838－1922）が予定されたが実際は岩倉具視（1825－1883）になった。大隈は長崎の致遠館でフルベッキから英語を学び、グリフィスの英文契約に手を入れていた。岩倉は北海道の開発調査のために来日のケプロン（1804－1885）委員長夫妻を自宅に招いたとき、グリフィス姉弟も招いている。（1873.11.22）またミカドの国になって兵学が日本の軍隊に変わろうとするとき、フルベッキのところで日本の政治家たちの秘密会議（１８７０）があった。国の防衛と個人の教育を一体化すべしというのがフルベッキの考えであった。

このように我々は歴史の横道を過去から現代にもどってきた。双六では揚がると振り出しに戻る。揚がらなくても途中から戻ることもある。歴史の場合も振り出しに戻るということが言えると思う。岩倉使節団の渡米の話が何故か話題にならず、福井のグリフィスの耳にはいってこなかった。欧米使節の話は秘密のうちにまとまっていざ出航となったのであろうか。たしかに海外渡航は早かれ晩かれ形を変えてでも実施されるものであった。

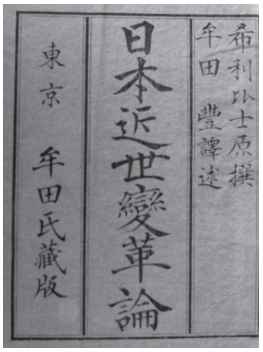
そこで簡単な調査であるが、日記や手紙に見るべきものがないとくれば、“The Mikado’s Empire”の中の第28章に岩倉具視らが望むと同じような考えを見つける、つまり振り出し

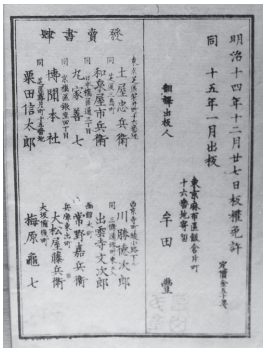
からもっと公明に政治がやれないものか。日本人のウソを日本人の特性として取り上げてグリフィスといっしょに考えてみよう。在日4年で帰国したその裏には日本は外から見るのがいいと悟ったグリフィスがいたのではなかろうか。

次にあげる例は皇国の進歩人との交遊で知った私的感想である。／欧米の高度な文明との接触／「大君」という大袈裟な称号は外交上のごまかし／翻訳書のすすめが精神的変化をもたらし現代文明への衝動を促す／天皇の権力は外国人が想像したより大きい／生涯で最も強い印象は城内の広い座敷で大名と家臣3千人の別れ。市民の涙、笑い、惜別。国民的心情が大名からミカドへの移行／政治の二重性は日本で最良で唯一の組織／青年に外国訪問と戦争と平和の理論と実践／人にも自分にも平等の精神／意欲のない武士の政府軍。訓練を受けた平民軍／条約の改正と忌むべき治外法権の抹消／五カ条誓文から「皇国の土台を築くために世界中の知性と学問を追及せよ」／選抜学生の海外留学。

これらのサマリーはこの誌に掲載の訳文からのもので、1871年から1874年における epochal years（画期的年）の時点でグリフィスが掴んでいた情報の一部である。extraterritoriality（治外法権）をテーマの岩倉使節団の抱える問題とフルベッキの思いの間にズレのあるのは認めるが toleration（信教の自由）への道が開けるなどの影響があった。よけいなことをしなくもがなだが、やはり気になるのは福井のグリフィスが岩倉使節団について情報なしの無風状態の中にあったことだ。'An incredibly large army of spies was kept in the pay of the government. Within such a hedge, the Government itself being a colossal fraud, rapidly grew and flourished public and private habits of lying, and deceit in all its forms, until the love of a lie apparently for its own sake became a national habit."（'The Recent Revolutions in Japan' 牟田　豊訳）「政府私カニ巨額ヲ費シテ無数ノ間諜ヲ四出シ以テ微密ヲ探訪ス蓋シ政府ニシテ此方畧ヲ設クル者ハ衆庶ノ耳目ヲ掩ヒ以テ其非ヲ蔽フニ過キス是レ詐偽ノ魁ナリ政府既ニ詐欺ヲ行フ斯ノ如ク甚シキカ故ニ下民忽チ之ヲマナヒ偽計ヲ逞シテ私利ヲ貪ル事ヒニ長シ月ニ拡マリテ官民公私共ニ校黠詐欺ヲ好ムニ至ル」（前編23頁上段の訳文を参考）

知らされなかったのだ。グリフィスに！そしてグリフィスのことが！　はたして案じたとおり、'The Recent Revolutions in Japan' では姿を見せなかった使節団が、この論文が "The Mikado's Empire" の中では、ワシントンの岩倉一行の歓迎ぶりに「世界史の舞台に正式に登場した」とグリフィスの歓喜にほころぶ顔があった。





訳文

平和は2世紀にわたり長く続いたので真面目な愛国者に考える時間を与えた。国民の大多数は、治める側と治められる側の両方の階級とも、長きにわたる繁栄と危険の無さによる無気力に慣らされてしまってこのようなことには無関心であったが、まじめな学生はミカドが再び昔の威光を回復するのを見ようと心を燃やした。この動機があったればこそ時宜を得た変革を起こせたのであろう。この者たちは日本が向上心を欠き、武術をやる気を失くし、戦闘精神が眠っているのを感じた。しかしながらあらゆる面で「強欲な外国人」が神聖な国を狙っていた。昔は壁であった大洋がすでに外輪船の通る道になっていた。カリフォルニアと太平洋沿岸の入植によって、落ち着きのない東部の米国人は大型蒸気連絡船が取り持つ隣人になった。米国の捕鯨船が日本近海を巡航し、日本人漁民の見えるところで鯨を捕った。米国船はたびたび日本の港に寄って2、3人の漂流民を連れ戻した。その者たちは数世紀にわたって無休の潮流のなかを黒潮に乗り太平洋を越えて漂着した。それによって難破、損害、部族、土語、おそらくその中でペルーやメキシコの驚異に米国を目覚めさせ、スペインの掠奪者にその貪欲を刺激する文明を与えたであろう。過去のことをすべて侮り、日本人の誇りと孤高を踏みにじって、米国人船長は蘭人の行為のように長崎へ行くのを拒否し、いきなり江戸湾に現れた。石炭の煙のたなびきが見慣れた醜いもの、終末の前兆の日常事になっていった。ジャンクの船頭の聞く汽笛が―昔のマキガイぐらいの能力の―すでに障碍の壁を吹き飛ばしていた。1年に松前を通る「夷荻」の「黒船」は86隻を数えた。北方の露西亜がサハリンに下りてきた。英、仏、蘭、米の国々が通商貿易の要求をせまった。幕府は怠惰で、凶暴な野蛮人に抵抗する用意をほとんど、まったくしなかった。先見の明のある人は外国人が現れると、江戸と京都という二つの政治の中心地の間で衝突は避けられず近いと見た。そうなった時、自然の成り行きとして、将軍側が負けるに違いなかった。サムライがミカドの側に就くのは封建制度の崩壊ということになるのは論理的に必然であろう。大名にとっては奢侈、豪奢、遊蕩三昧の時代であったが、庶民にとってお先真っ暗な時代であった。

もう一つの思考の川がミカド復古に向かって流れていた。それは純粋な神道の研究の復活と呼んでもいいが、近年の変革の原因を調べるとき見逃すことができない。仏教と儒教の導入は古代の信仰を大きく変えた。いや「腐敗させた」。学者の一派が今の神道を追放して、原初の形で表現しようと努めている。

神道によると日本はもともと神々の国であり、ミカドはその神々の代表であり後継である。日本人の義務はだれしもミカドに絶対に従えということになる。将軍が仏教を優遇し信仰を告白した長い治世の間、実際、真の神道とは何かを知る人はなかった。神道のバイブルに当たるのが西暦712年に編まれた『古事記』である。他にも『日本紀』、『万葉集』のような数種の作品が神道者の目から見れば『古事記』とほぼ同

様に古くて価値がある。それらは古代の日本語で書かれていて、日本語を古語専門に研究するものにしか読めない。日本の古代文字の研究と歴史のそれにたいする嗜好の発達はほとんど同時期であった。中国の学問のために日本古来の学問の軽視が国中に広がってしまってから、はじめて契仲、荷田らの学者がその評釈研究を復活するにいたった。幕府はそういう調査研究に水をさしたが、京都のミカドと公家は道義的、金銭的（とも言われる）協力を全面的に行った。真淵（1697－1769）、本居（1730－1801）、そして平田（1776－1843）は相次いで弟子となり、純粋な神道における最大の光となる。その著作物は宇宙、古代史、国語、ミカドの正しい地位と神道祭式に捧げられていて、京都、水戸、越前、薩摩をはじめ、他の多くの藩に活発な影響を及ぼした。これらの藩では幕府の廃止と王政復古を遂行する意図の政治的結束がすでに出来つつあった。神道研究の必然の結果はミカド崇拝の増進になった。仏教、漢学中国の影響、儒教、独裁政治、強奪、そして幕府が神道者の目には同一物に映った。神道、古代の真の宗教、愛国者のすべての望み、よい政治、国家の純潔、黄金時代、キリスト教徒の間の「ミレニアム」の考え方、これらが最高に現れた生活とミカドの権力復帰とは同意語であった。神道者の議論は伏見で洪水と化した潮流のふくらみに役立った。1868－1870の戦いの後、その戦争と「再建」の問題をとことん筋を通し厳しく急き立てた激しい闘士はいなくなった。神道者と歴史家からなる文学研究こそが将軍、幕府、そして封建制度をついに崩壊させる世論を形成したのである。

外国人がたどり着くずっと前から改革の種が土壌の上にあった。水戸の老公は由緒ある先祖の高貴な子孫であるが、神道を説き、将軍を説得して政権をミカドに渡すのに手を焼き、１８４０年、武器をとって武力行使に出る決心をした。武力を固めるために仏教寺院を分捕り、そこの梵鐘を溶かして大砲を鋳造した。急遽、幕府は水戸老公の戦闘体制を抑え、老公を監禁し、12年後ペリーの来航による動揺が起こるとようやく解放した。

その間、薩摩、長州らの藩は強力な軍事力を備えて、起こるかも知れない外国人の侵入者を追い払う体制に入るばかりか、今になって分かるのだが事件が証明するように、将軍をミカドの家臣の一人としてその適正な身分にまで下げるに到った。このうちもっとも有力な藩の先祖は昔から家康と同じ地位と権力を有したが、ついに勝運に見放された。武力によって征服されたか、圧倒的な反対勢力に直面して何も言うことなく降参した。この勢力の徳川家への追従は名目だけで、ただ最高権力の強い圧迫が従順という尊大な立場を自分のものにねじり取ってしまった。実際は同じ藩主の身分であった者の支配のもとに降服した。一度ならず堂々と立ち向って幕府の指図を無視した。薩摩藩と長州藩の目的はほとんど秘密裏であったが、将軍の生命を奪って、ミカド以外の権力を認めないことであった。

南の藩からついに協議の声、密かな陰謀、クーデターが起こり、そして労働の目的で働かす畑から水戸の武装が蜂起した。けれ

どもそれを支持する輿論を歴史家がその文に書かなかったならそれらは成功しなかったであろう。もし刀と筆、頭と手の両方が等しく強力に助け合わなかったら、学者はその心からの願いを満足させることは出来なかったであろう。

南の大名の間で、個人的特長、能力、活力、先見の明があることで傑出していたのが薩摩藩主であった。薩摩は加賀の次に大名の中でもっとも裕福であった。もしその藩主が生きていたら、間違いなく１８６８年の革命運動を導いたであろう。藩主は古書や歴史の研究者を勇気づけた上に、藩の資源開発と軍事体制の完成に積極的であったので、いざ幕府打倒の機が熟したときはミカドの政府を完全に成功させるため軍備の出せるようにしたかも知れなかった。藩主は計画を実行するための、蘭語と英語の勉強を奨励し、かくして近代戦術と科学的改良を学ぶ。洋式の大砲鋳造所を設置した。さらに必要なあることに気づいた。青年を外国に訪ねさすべきである。行った所で戦争と平和の技術的方式の理論と実践を体得させることであった。幕府の法律は国民の自国を出るのを禁じていたので、幕府は違反者を捕らえるのに躍起であった。けれどもあとになって、賢明な工夫によって優秀な青年、全部で約27人が一艘に乗ってヨーロッパへと向かった。そして江戸政府の役人の見張りにもかかわらず英国や米国へと青年たちはあとに続いた。これら青年の中には今日、日本政府の高官になっている。

この藩主の名声は帝国中に広がり、日本各地から多数の青年が教えを請うて集まった。その都市、鹿児島はにぎやかな手工業と知的活動の中心地になった。この心と手の強烈な活気に歩調を合わせて次のような気持ちが高まってきた。すなわち幕府も長くはない、崩壊は必死、そして唯一の権威の根源はミカドであった。薩摩の武士や青年はみな藩主を来るべき危機に立ち向かう人として当てにしていた。そんな時、１８５８年云うに言われぬ悲しいことに藩主は病気にかかって死亡したのであった。実権は弟の島津三郎が継いだが、この人ほど多くの優れた生徒を世に残した教師はなかった。人に最も信頼され、人をも信じるに足る人に西郷、大久保、勝がいた。これらの名前をあげると真っ先に日本人の心を揺さぶる戦争を思い起こさす。西郷は官軍の指揮官になった。幕府の不屈な敵、大久保は会議を動かす精神であり、王位の背後でその動きを論理的結果に駆り立てる力であった。このような時、外交的桂冠を被る佐賀の乱の鎮圧者であり、北京における平和の征服者が内閣のリーダー、日本において最前を行く男として浮かぶ。勝は幕府に長州とは戦わぬように、また主君にその地位を辞めるよう忠告して江戸を破壊から守った。有名というほどのことはなく、知名の士というには落ちるが、今日、信頼すべき地位に就いて、また、無私のシンシナティ人のように愛国心を発揮している学生が薩摩には名前を挙げられないほどたくさんいる。

上述のごとく人目に曝された事実に精通することで米国使節団の到着に続いて押し寄せた出来事が理解されよう。幕府は明ら

かに権力の頂点にいた。江戸の将軍家慶は無精者であった。京都のミカド、孝明天皇、今の天皇の父は、本当の地位はこのようなものではないことを十分に理解し、幕府を盗賊の巣のように憎み、外国人を不潔な獣のように憎んだ人であった。国内には革命の気運が熟していた。不吉な静穏の下で耳を傾ける人は政治的地震のうなりを聞くことができた。また外からはサイクロンを予知する大気中の律動のように、次々と知らせが来た。１８５３年、７月８日、自然の空と海はまったく穏やかな風情であったが、威風堂々たる「異人」艦隊が江戸湾に入航してきた。それは台風の外縁であった。サスケハンナ号が17カ国の船団を率いていた。

横浜の波止場に一人の見物人の姿があった。男はあのような船を造れる者、礼儀正しく、親切で、我慢強く、強固な者、武力を持っていて使わず、平等な扱いを受けることを要求し代わりに日本人にも平等に扱う、これが野蛮人であるはずがないと納得した。もしその者たちが野蛮人なら、日本人のほうがもっと野蛮人に相応しかった。その男こそ勝といって今の日本海軍卿である。

その野蛮な公使は奇妙な人であった。江戸湾を出て長崎に行くように言われた。公使は慇懃に断わるとそこに留まって測量して威厳ぶった。このようなことは法外であった。他の野蛮人はそういう行動は取らずに冷静に命令に応じた。その上、公使は手紙と贈り物を携えてきたがそれらはすべて「日本国の皇帝へ」捧げられてあった。将軍は皇帝ではなかったが、そうであると信じさせる必要があった。ミカドの将軍にすぎないと明言することは断じてなかった。将軍の称号は国内では十分に脅威をなしたが、外国人はそれに敬意を表しただろうか。江戸の漢学校の衒学者（漢字の第一人者にあらず）が野蛮人のペリーと交渉するよう送り出された。中国論理の生齧り、正確な用語を誤る衒学者は義務に縛られて将軍を持ち上げねばならなかった。条約に際して大君という生粋の中国語の称号の使用を口挟むか許可するかしたが、公式文書の大君は日本最高の支配者を意味した。幕府と衒学的教授の林が京都の真の皇帝に虚偽を言うつもりはなかった。幕府は蛙のように腹は白いが背は黒いので、仰げば白、伏せば黒、白黒どちらも向き2面に出る。京都から見ると、その虚偽は白、つまり、「無意味」であった。なんら疑うことを知らないお人好しの野蛮人から見ると、その虚偽は黒、つまり、ペリー条約の前文に出ていた「堂々たる日本の大君」であった。けれども強情な天皇と朝廷にとって、この白い虚偽は例に漏れず、虚偽のなかで最も黒かった。それは最大の不安と驚愕を起こした。将軍はこの権威の大げさな思い付きにはまったく権利の影すらなかった。

それはイソップ物語の第26番を外交的に新たな読み方をしたものであった。大きな江戸の大蟇が京都の牛と肩をならべるため精一杯に膨らんで見せて、そのあげくに破裂してしまった。１８６８年、これらの外交上の両生類最後の死体が静岡に埋められた。そこは東京の西南75マイルの都市である。１８７２年、筆者はこの徳川家の古い館を訪ねた。まだ生存中の最後の「大君」

の実際の住処から1マイルの、数千の元家臣が呼ぶと聞こえる距離の建物のなかに、ペリー提督の贈り物が何十となく置き去りにしてあるのを見た。多くは湿気を帯び、錆びたまま放任してあった。どれにも「米合衆国の――――から日本のミカドに贈る」のラベルが付いていた。けれどもミカドは見ていなかった。日本人はひやかしに勝れているが、何時からそんなでっかい皮肉を飛ばすようになったのか。朝廷は大君にラベルのままで贈り物を保存する許可を与えていた。ピラトのアイロニーのように知って知らぬ顔をして。

ペリーのような練達の外交官は、もし真の国家事情が分かっていたなら、江戸で皇帝の副官と始める代わりに、艦隊を率いて大阪へ行き、京都の皇帝と談判を始めたであろう。おそらくペリーは下役と交渉したとは知らなかったであろう。

１８５９年、外国と通商のための開港した直接の結果は生活必需品の価格の変動、それに続く全国的窮迫、外国の病気の輸入から増える病死であり、それに加えて破壊的地震、台風、洪水、火事、そして嵐がこれまでになく引き続いた。この災難の真只中に将軍家定が死亡。

世継ぎを選ばなければならなかった。それは大老の井伊に任せられた。井伊は偉大な能力の持ち主、勇気があり、敵の言うごとく悪巧みに長けた反逆者であった。井伊は社会的に低い元締めの出であったけれども、ほとんど絶対的権力を有していた。慶喜（水戸藩主の七番目の息子）という一ツ橋家の跡継ぎになっていて、その選ばれるほどの人気を無視して、井伊は12歳の紀州の幼公を選んだ。水戸、越前、それに尾張の親藩々主の憤った抗議に答えるに禁錮を持ってし、徳川家の近親を支持から外した。敵方に言わすとそれは北条のやったようにミカドの力を弱め、再び少年天皇をその位に就けるための慎重な目論見であった。同時に、井伊や幕府に逆らったり、京都や江戸やどこででもミカドの復古を騒ぎ立てたりした者を井伊は懲らしめ、禁錮し、追放し、打ち首にした。これらの犠牲者の中には立派な学者、愛国者らが多くいてその運命は世間の憐れみを買った。

ミカドは権利の上から最高の支配者であり将軍はただの家臣であったから、ミカドの署名がなければ外国人との条約締結はありえず、廷臣もまた勇ましく承認を拒絶した。井伊は逡巡するような人ではなかった。日本人記者の記すところによると。「このように様々な国からいきなり外国人が来るのを前にして京都の連中が決定するのを待っていたら、なにか不慮の出来事がすでに中国が経験したのと同じ被害を日本にもたらすかも知れないと井伊は思い始めた。そのために井伊は神奈川で条約を結び、それに自分の印鑑を押し、その後その執行を京都へ報告した」。

条約協定のこの署名にミカドの承認がなかったことが京都と国じゅうに強い憤りを巻き起こした。今やその憤懣は津々浦々に「尊皇攘夷」の叫びになって反響した。愛国者の目に大老は反逆者に映った。大老の行為が幕府の敵に反目の正当な口実を与え、その終焉の信号になった。国中の数千の愛国者がその家を離れて、ミカドが権力の座

に復帰して夷狄を国外へ一掃するまで家に戻るつもりはないと宣言した。愛国心に沸きかえる暗殺者の一味はたいてい浪人だが、国内を徘徊し外国人か摂政を斬ってミカドのために死ぬ覚悟であった。3月23日、井伊が江戸で暗殺された。その場所は江戸城桜田門の外であったが、現在は陸軍省と外務省の庁舎と大工兵学校のゴシックのレンガ校舎が建っている。その後、無礼な外国人の殺戮、ときには無実の外国人の場合もあり、公使館の焼打ちと続いた。しかしその主な目的のほとんどのすべての場合、幕府を外国の勢力から切り離してその崩壊を早めることにあった。これらの未熟者のなかには外国人の目に扇動者や暗殺者に映るものが居て、日本人には立派な愛国者にみえたが、いま、皇帝の政府の高官になっている。

幕府の威信は日に日に落ちた。その影響と勢力の波は着々と本物の首都へと向かった。将軍が京都を訪問してミカドに恭順を捧げる習慣が２３０年ぶりに復活した。そのことはミカドとの本当の関係を国民にもはっきり分からせ、支配は存在していたが長い間不当に無視されていた事実を人々は初めて知った。越前藩主は首相に任じられた。それは幕府に特別な前例のない条例によって京都の朝廷の命令に従うというものであった。多くの人の信じるように越前藩主は大体において南側の大名たちに好意的な猫の手に過ぎなかったけれど、自らの条例によって大名に強制された江戸住まいの慣行を廃止した。開けた籠から逃げ出す野鳥のごとく大名たちは家臣を引き連れて１週間足らずで江戸を離れた。江戸の栄光は夢のように消え、徳川の権力と名声は不毛に帰した。幕府の命令に従う藩はもはやほとんどなかった。人民の心は次第に離れていった。例の日本人記者いわく、「かくして３００年持ちこたえてきた徳川家の誇りは一朝にして滅亡した。それは頼朝の時代に星の輝く月夜の鎌倉より明るかった。それは２７０年以上の間、大名たちを呼びつけてひっきりなしに江戸で代わる代わる責任を取らせ、日夜８０，０００の家臣をあごで使っていた。一朝日光に遭って霜露の消えるように滅びて行った」。

今や、諸藩が本当の都、京都に集まった。京都は平氏の時代以後はおぼえのない陽気で騒々しい舞台になった。諸藩は幕府への同盟を終えて藩独自の意思に従うか朝廷に請われるかどちらかの行動に出た。そして皇室の金庫を黄金で満たし天子の手を忠実な献身で強化した。外国人嫌いと空っぽの財源を商業の振興で満たしたい気持ちが葦の中の風のように多くの諸藩の心を揺さぶった。また領地内の港を開いて、それまで幕府が独占していた外国との商業で得る利益を自分のものにしたいと思う藩もあった。紙上戦が起こった。諸藩は幕府のお陰で同盟を結んでおられることを表わそうと試みる筆者がいる。またそういう考えは反逆であると決め付けその歴史上の事実があるのでミカドが唯一の統治者であると証明する筆者もいた。幕府は京都の世論の圧力に働きかけその名誉を挽回せんものと港を閉鎖し外国人に日本を出るよう全力を傾けた。この目的のために幕府は欧羅巴へ使節を送った。浪人たちは先を急ぐために計画に反

対する者を計略的に暗殺し始めた。そして都の前を流れる川の乾いた川岸にその首を曝した。徳川「略奪者」への見せしめに最初の足利将軍3体の木像の首を切って、竿に突き刺し人目に曝した。浪人は逮捕された。長州は浪人の味方になったが、会津藩主は京都県令になって浪人を投獄した。騒々しい狼藉者や「毛唐」を見たこともその威力を想像したこともない公家に唆されて、皇帝ミカドは外国人の日本国外追放を布告した。長州人は真っ先に行動に移り下関に砲台を建設した。幕府は外国人に義務があるので、長州藩に軍備を解くように命じたが拒否され、1863年7月、長州藩は外国船に発砲し、皇帝ミカドに従い将軍に背くことになった。翌8月の間、鹿児島が英国艦隊の攻撃をうけた。

9月4日、長州の砲手が幕府の蒸気船に発砲した。その船には数人の小倉藩士が乗り込んでいた。それらは長州の敵で、外国船にある種の援助と慰安を与え、長州への発砲を拒んでいた。京都の長州人がミカドに、大和へ前進して夷狄に抗して陣取る意志のあることを国中に示してほしいと懇願した。この進言が受理されて準備が整っているとき、突然すべてが中止になった。長州が最も暗い疑惑の的になり、御所の門は二重に護衛されて市内は凶暴な動きに巻き込まれた。他方、朝廷の審議の結果、三条実美（現在の太政大臣）、沢宣嘉（外務卿、1870-71）のほか5人の公家が追放になってその地位と職名を奪われた。そのほかに18人が処罰をうけ、毛利家（長州）一門の武士は否応なく「京都入りを禁じられた」―その者らを無法者呼ばわりする言葉。軍政が敷かれて都は防備体制に入った。

こうなった理由は長州人が帝国の政策を指示するためミカドの身柄を拘束する計画を企てたかどで咎められたからだ。18人の公家と6人の首班がその計画にかかわったとして嫌疑を受けた。このことと、代理公使を乗せた蒸気船に発砲したことに幕府は立腹した。幕府に忠誠な藩、特に会津は大いに憤慨した。1863年9月30日、長州兵は7人の公家を伴って国許へ逃げ出した。

長州は日本各地の脱藩者と浪人のたまり場になった。翌1864年7月、さまざまな藩の無責任者で「無法者」と自称する数百人の一団が南側から京都に着いて、毛利と7人の公家の名誉回復と攘夷をミカドに懇願した。会津と将軍の家臣は直ちに兵器で向かい打とうとした。ミカドは懇願者の考えを採らず返答しなかった。7月30日、「無法者」はこれまで静かであったがいまは昂ぶった多くの長州人で膨れ上がり、郊外に陣取った。そこに8月15日、2人の家老と長州から出てきた200人の兵隊が合流した。仲間の暴力を抑えるために藩主の毛利から差し向けられて来たのである。かくて我慢して待つうちに、8月19日、懲罰の勅令が朝廷から下されると今度は、会津と慶喜の指揮のもとに粛清軍の命令下に置かれた。

朝廷の友人にたいして涙ながらに悲しい恨みの手紙を書いて、長州人と浪人は建白書のなかでその起因の正当性を訴え、会津への復讐を誓った。会津の軍隊は朝廷の花壇に陣取っていた。それから「帝位のお膝元で騒ぎを起こすこと」の許しを天子に乞

うと、戦闘の許可をもらって攻撃に突入した。日本人記者曰く。「危機は始まっていた。人殺しの精神が天地に広がり溢れた。「朝敵」という言葉が数世紀も使われずにあって、いま、再び復活した。無数の家屋が破壊を受け、数百万人が地獄の穴に落とされた」。１８６４年８月20日の夜明け、戦闘が始まった。長州人総勢１，３００が３つに分かれて進んだ。皇居の９つの門を攻撃し、花壇を包囲する計画であった。徳川と会津の軍隊は越前、彦根、桑名と他藩に後押しされた。激戦は２日続き、京都の町を戦火に包み、折からの疾風に煽られて町の大きな地域が灰燼になった。戦闘は甲冑を着け、大抵は刀、弓矢、キャノン銃砲、マスケット銃で武装した兵士によって戦われた。８１１の通り、２７，４００軒の家屋、18の宮殿、44の大きな屋敷と６３０の小さな屋敷、60の神社、１１５の寺院、40の橋、４００の乞食小屋に穢多の村が焼き滅ぼされた。１，２１６あった耐火の倉は戦闘後に続いた連続砲撃によって木っ端微塵にされて長州人が倉に隠れられないようにした。「九重の花に囲まれた都が一朝にして戦火の炎と煙の中に完全に消えた」。家を失った都人は郊外へ逃げて、無蓋の地面に住んで暑熱と雲霞のごとき蚊に悩まされた。また軍服の兵士は恐れも恥もなしに強盗を働いた。「花の都は焼けつく砂漠になった」。長州はまったく敗北して、町から追放された。37人が捕囚になった。

翌月、幕府は朝廷に毛利家とその一族郎党をことごとく解任するよう乞うた。この成功に元気づいてすべての藩に長門と周防の２藩を懲罰にあたる命令を出した。こうして徳川家は動揺する藩に範をたれ、まだ持っている権力を証明するつもりであった。その月のうちの１８６４年９月５日と６日、下関は４外国の旗を掲げる同盟艦隊の砲撃にあった。生命と財産の大破壊の後、寛大な勝利者は３００万メキシコ・ドルの「賠償」を要求した。京都で幕府に立ち向かってきたかの勇敢な藩は「文明世界」の優れた能力に敢然と立ち下関で相手の銃に面と向かったがついに圧倒的数の砲弾と兵士にやられていまや将軍の混成軍と直面するに至った。

その時、南側において長い間前もって戦争に備えていたことの結果が出た。長州藩士は結束力、機敏性があり軽装であった。英国と米国の銃で武装し、西洋式戦術の訓練を受けていた。大砲を豊富に備えていた。それで矢継ぎ早に正確に砲火した。甲冑、刀剣、槍は投げ捨てていた。長州は長い間、蘭学の熱心なところであったので和蘭式戦術書の翻訳が数多く作られ使われもした。訓練をうける軍隊は武士からだけでなく平民からも募集されたが、給料がよくてやる気満々であった。寄せ集めでやる気のない幕府軍の多くは進めの命令がでると、とたんに戦闘意欲を失って病気になった。もっとも有力な藩のなかには遠征に加わるのを断ったり堂々拒否したりした。遠征の目的が大抵のもっとも賢明な指導者、特に勝安房のような将軍のご意見番によって強く非難された。

１８６６年の夏３ケ月にわたる戦いは幕府の不名誉な完敗と長州の勝利に終わった。まだ戦場にいない藩は前線へ行くのを断っ

た。将軍の誇りはいまや取り返しの付かないほど台無しになった。

若い将軍は打ち続く心配に疲れきって大阪で死す、１８６６年９月19日。将軍は皇帝ミカドの条約承認を確保していた。それには条約は改正すべし、兵庫は外国貿易港にしないという条件があった。慶喜がその後を継いだ。以前はライバルであったが１８６６年10月、朝廷によって徳川家の当主に任命された。１８６７年１月６日、慶喜は将軍になった。繰り返しその地位を断ってきた。その地位にいてたくさんの私的長所を発揮したが、迫り来る危機を前にしてただ羽根のような堅固さしかなかった。一般に日本人は中国人の堅固さ、頑固さに欠け、優柔不断が主な性格に思われる。慶喜は優柔不断を絵に描いたような人であったらしい。慶喜の昔の親友にそう言うのがいる。もし相談役の助けを借りて一連の行動に決意を固めても、新しい助言者が現れた時にかかり易い変化をいかに鋭い観察者でも予測できなかろう。明らかにこのような危機にそういう人の任命は問題を急かすのに役立つだけだ。朝廷における慶喜の人気はおそらく外国人に兵庫と大坂の開港に反対した事実から生じたらしい。

１８６７年10月、土佐藩主は新将軍に辞職するように公然と勧めた。一方、西郷、大久保、後藤、木戸、広沢、小松ら多くの有能な武士は、島津三郎や越前、宇和島、肥前、土佐ら身分の高い前藩主たちに背中を押されて、西暦１２００にさかのぼる反将軍時代を基礎にした政府構成を勧告した。非常に強力な連合政府ができたので１８６７年11月９日、右顧左眄の慶喜は世論の力に負けて征夷大将軍の辞職を申し出た。

この古代の体制へ向かう足取りは長かった。けれども日本におけるようにどの党、どの指導者がミカドを味方につけるかで状況は左右する。徳川家にもっとも忠誠を尽くす会津藩が朝廷の門を護衛したので、実際の権力が何処にあるかが依然として不確かであった――朝廷は徳川藩にはいるのか、大名の会議に加わるか、そもそも正当にはそれはどこに属すのか。影響力の強い薩摩、長州のサムライと土佐、越前、宇和島の藩主はその問題で気を揉ませてはならないと決議した。連合の兵士の小集団が次第に京都に集まった。西郷と大久保、木戸、後藤そして岩倉は熱心なあまりこの最高の機会を逃すわけにはいかなかった。孝明天皇が病気で命が危なくなった瞬間を捉えて、大胆なクーデターによって将軍の役目と幕府を廃止し、若い皇帝天皇を最高の地位において古代を基礎とした政府を再建する、そのために朝廷を揺さぶり始めた。

１８６８年１月３日、連合軍（薩摩、土佐、越前、安芸、尾張）が突然、朝廷の門を分捕った。これまで少年天皇を取り巻いていた公家は解雇され、連合政府の見方に賛成する者だけが朝廷に入るのを認められた。こうして追放されると朝廷はミカドの名において勅令を出して、日本の政治はいまやもっぱら皇室の手中にあると述べた。幕府と将軍の役目は廃止された。臨時政府は三層の役目を伴って形成され、地位は新しい支配者に忠誠な部下でたちまち埋まった。毛利家は再興されて、追放になった７

家臣は呼び戻された。三条と岩倉は皇太子で行政長官有栖川宮の補佐役になった。

徳川家臣の義憤は納まらなかった。優柔不断な将軍は今になって退位を悔やみ、権力の座に戻りたかった。いまだに尽くしてくれる藩をつれて京都を出た。追従者の熱意を静めるつもりにみせかけ実際は大阪を獲得して南部の藩士との交流を阻止するつもりであった。しばらく後の1月19日、薩摩藩の江戸屋敷が幕府軍に襲われて焼かれた。朝廷は尾張と越前の藩主を使わして慶喜を招き、新政府に加わり以前よりも高い役目につくよう約束させた。慶喜はそのように約束したが使者が去るや早いか会津の武力を整えて再び力ずくで京都に入り、「若い天皇の悪い相談役」を追い出し、「刀で問題を解決する」という会津の好戦的な協議に負けた。朝廷から軍力を率いて京都に近づくのは禁じられた。京都に通じる2本の道路に障害物が立てられた。南側の藩士、その数2，000人ばかりが装備して障害物の後ろに陣取った。慶喜は大阪を1月27日の夜発った。会津と桑名の藩が先頭に立って、後にざっと10，000、それとも30，000の兵士が続いた。伏見で慶喜の使者が障害物を越えるのを拒否された。官軍（忠誠軍、京都兵力）が砲撃した。戦争勃発。将軍の追従者は政治の将棋盤上の最後の動きによって朝敵になってしまった。その誇りは吹っ飛んだ。

戦闘は3日続いた。圧倒的勢力を前にして、南側のサムライの勇気はひるまないばかりか、先立つこと数年の軍事教練の結果も出した。戦闘に味方したのは強さではなく、知性、活力、沈着、そして勇気であった。将軍の軍隊は敗れた。ちりぢりばらばらになって大阪へ逃げた。大阪の歴史上有名な城は官軍に焼かれた。未公認の将軍は米国船に避難し、味方の船で江戸に着くと自分の城に隠遁した。その一族の家臣、臣下の譜代大名のほとんど、会津と仙台の大名、他にも東北の大名は将軍に戦争の新規巻き直しと将軍の名誉の回復を進言した。家老の一人は将軍に切腹を真剣に迫って徳川藩の名誉を保持するためにその必要を説いた。その尽力は不首尾に終ったが、提案者として家老は厳粛に割腹した。戦闘に要する軍隊、貯蔵兵器、武器弾薬は多数あり、それに率いる艦隊もミカドの艦隊を大量に超えていて、成功の機会は十分にあった。しかし今度は臣下として忠誠であり、浮き立つ足もぐらつかなかった。まさに朝敵になる思いを忌み嫌って、戦いを勧める者に耳を貸さずに勝安房と大久保一翁の2大老の忠言に耳を貸した。そしてミカドに向かって武器を取らないと宣言して隠居した。この人をワシントンと比べる。ワシントンは国を救うために長い内戦を指揮するのを拒否したという。しかしこの比較は聞いたことがあるけれども、あまり適切には思えぬ。個人としては、慶喜は教養の高い紳士である。野心家で虚弱体質であったが。政治上、ただ義務を果たした。用心が勇気の大半（逃げるが勝）になった。慶喜の中に天才的性質や証拠の崇高な証を見るのは難しい。むしろ勝と大久保にその生涯の最後にして最上の決心を委ねていた。薩摩の古い生徒で西郷の友の勝は政治力のミカド復帰は至極尤もであると前々から予見してい

た。汚名と暗殺に勇敢に立ち向かいながら主君に退位を勧めた。西郷に導かれて勝利した南側の諸藩は江戸の南の郊外にいて江戸攻撃に備えていた。日本の都市を破滅するには1本の松明があればいい。もし抵抗があったら、待ちきれないでいた勝利者によって江戸は灰燼に帰したであろう。勝は西郷に会うと将軍に降伏の気持ちのあることを確信させ、かつ江戸を救うよう懇願した。勝の願いが成就した。慶喜の狂信的家来たちは上野の寺の境内を砦にした。7月4日、攻撃を受けて完敗し、江戸自慢の立派な寺は灰燼に帰した。戦争の脅威は会津若松の高地に移り、蝦夷の松前と函館に移った。いたるところ勝利はミカドの錦の御旗の上に翻った。1869年7月1日、反乱の形跡はことごとく止んでいた。「皇国は遍く平和に感謝した」。

ミカド側は一般に革命がもたらす混成要素から成っていた。高邁な愛国者と並んで、あらゆる種類の悪名高い放浪者やならず者、浪人といった低い身分の帯刀者、攘夷という「外国人嫌い」、「鎖港論者」、神道の宮司と書生がいた。少数の真面目な者がいてその最愛の望みは代議制に基づく政治の確立を見ることであった。他方、それより少ないが日本の西洋文明採用と西洋諸国への仲間入りを熱心に願う者もいた。この人たちは自分の見方を推進し、自分の目的を達成するためにあらゆる意見の傾向や反主流を利用してきた。だれにも共通の目標はミカドの地位を高めることだった。多数の人を一緒に結ぶ絆は次なる一つの決意であった。すなわち外国人を追放する、あるいは条約を改正して忌むべき治外法権—あらゆる愛国的日本人の側でまだ疼く棘—を抹消することであった。18ヶ月間、攘夷のエネルギーは謀反に加わった徳川の家臣との戦場で使われた。戦争が終って新政府の試練が始まった。低い身分の2本差したちは外国人が日本から追い出され、港が閉鎖される約束の成就をしつこく要求した。神道の学士は日本人の「キリスト教徒」を迫害するよう政府を勧誘し、勅令によって仏教の廃止と神道の確立、そして純粋な神権に基づく政治の復活を要求して「攘夷」の叫びを繰り返した。高官の多数をもってしても外国人追放の目標を放棄することは皆無だった。やろうとしたが、どんなに賢明な高官でも現状では出来ないと分っていた。従ってひたすら機が熟するのを待って力を蓄えるのを望んだ。数千の威張った武者を苛立せずにおくのは至難の業であった。というのもパンを得る道具は刀剣だけだった。最初の関心は国の軍隊の再編成と皇国の軍備資源の開発に向けられた。これらすべては外国人を追い出し、貿易港を閉鎖し、専制的孤立の時代を取り戻すという理由を念願の目的として行われた。外国文明に対する欲望はむしろ徳川の支持者のなかにあった。というのはその人たちに学生や旅行者ばかりでなく多くの啓蒙的紳士で欧米に行った者がいて、自国で外国人の発明したものの利用を望んだ。けれどもかつて外国人の追放を望み、港を閉鎖し、条約の否縁を望み、攘夷、すなわち「外国人嫌い」、外国人をみな獣より2、3度上と見做した、まさにその人たちの多くが今やミカドの政府の一員となり、啓蒙思想の解説者であり、

フイロ-ユーロピアニズム、すなわち西洋文明の擁護者であり実行者になっている。

何が原因でその者の夢の精に変化が起きたのか。何故一度は破壊した信念を今になって説くのか。「鹿児島と下関で学んだ教訓がそれだ」とあるものは言う。「通商から受ける目の前の利益がそれだ」という者。「変革の子は乳母に預けられて変った。そして今の政権をにぎる政府は間違って或は意図的にゆりかごに入れられた」という者。

砲弾、通商、外国人と実際の交際は疑いなく目から鱗が落ちるのに役立ったが、援助に過ぎなかった。そういう手段は中国で半世紀試されたがすべて失敗した。日本でも失敗しただろう。日本人に国際礼譲の参加を促したのは内からの衝動であった。日本人の性格でもっとも高尚な特徴は自分の間違いや劣っているのに気づくと進んで好転することである。このため上に立つものは一度壊した信念を説き、一度説いた信念を壊すようなことをした。

ミカドの従者を啓発する大仕事は日本人指導者、大久保、木戸、後藤、といった古代の日本文学と外国思想の両面の学徒たちによって始まった。この仕事は日本人作家によって終った。公家という朝廷貴族は外国人の存在を無視し、国から追い出すか、或は外国人を外務省といっても当時は低く見られた外務局の低い地位の役人に指名して困らせようとした。大久保、後藤、木戸は直ちにこれに反対して、朝廷の貴族、東久世を、宇和島藩主伊達と共に兵庫へ送り、ミカドの条約承認をもらうと外国の公使を京都のミカドとの謁見に招いた。英国及び和蘭の公使は招待に応じたが他の公使は辞退した。英国の全権公使団が狂信的暗殺者に襲われた。暗殺者の一人が英国騎兵の銃弾、槍、軍刀に抵抗したが後藤の一太刀でその首をおとす始末であった。後藤はミカドの謁見には安全を図る決意で外国人の側を馬でいった。見たことのない人びとをひと目見たときの皇帝の機転は徹底的で即座であった。一度は獣と思った外国人と仲良くなった。

ミカドへの建白書のなかで大久保の建白書は朝廷と動揺する大名の肝を潰す考えを請願した。下記のごとし。「中世以来、日本国天皇は幕の後ろに住んできた。地面を踏んだことがない。幕の外で起こったことは何一つその御耳に入らなかった。天皇の住まいは奥深く隔絶されているので、外の世界と違うのは当然であった。わずか数人足らずの公家が玉座に近づくのを許されたが、天の原則に最も逆らった行為であった。天子を敬うことは人の最初の道であるが、もしあまり高く崇めると天子はその業を怠る。他方、君主と臣民の間に亀裂が生じる。というのは臣民がその欲求を君主に伝達できないからである。この罪作りな行為はあらゆる時代を通して普通のことであった。しかし今、大仰な礼儀は廃止させたい。簡素が第一の目標である。京都は辺鄙な位置にあり政治の場所に相応しくない。天皇に一時大阪に住んでもらって江戸に首都を移して、過去の時代から受け継ぐ百の弊害の1つでも直してもらおうと思う」。

建白書は朝廷に早速活発な効果をもたらした。若いミカド睦仁は単身で国策会議の会合にやってきて、公家や大名が誓約しな

いうちから実際の支配者のごとくに宣誓した。「審議会を形成せよ・すべての法案は世論が決定せよ・昔日の非文明的陋習を破棄せよ・自然の働きに表われる公平と正義を行動の基礎として採用せよ・そして帝国の土台を築くために世界中から知性と学問を追求せよ」。この誓いが皇国の基である。

これらの約束は操り人形の大げさな大言壮語か、寛大と知恵をもって国民をより高い生活に導くよう鼓吹する君主の充実した言葉であるか。あの崇高な瞬間にそのような言葉が東洋の専制政治の主導者の口から出るということが西洋の同情的称賛を呼ぶ。その言葉はヘブライの預言者の予言的質問「一国は直ちに生まれようか？」に対して肯定の崇高な反響に思える。そしてまた新しくてより高い国家発展のうれしい先触れに思える。その発展は人間性に最も強い信念を持つ人だけがアジヤの一国に可能と信じる類である。そもそもその言葉は16歳の少年が語ったものだが、気高い心の成り上がりものから少年の口に入った言葉の恐ろしいほど重大なことを夢にも思わなかった。この成り上がりものが事実上、少年を皇帝にしていて、自分らの考えを新政治の基盤にしてもらおうとした。建白書の結果、大久保とその同盟者の絶え間ない活動は最終的には政府の江戸移転であった。ミカドが京都を離れて知らない都市で住むとき、帝国中に起こった深遠な感動を一外国人が理解するのは容易でない。1，000年の間、京都は大日本の首都であった。通説によれば25世紀に渡ってミカドは聖都の場所に近いある地点から支配してきた。大和魂に燃える狂信者の一団は宗教上反対した、が無駄に終わり東に向かって旅たつ。今は、江戸が皇都であることを親しませるために、その名も東京、すなわち東の都に変えた。

それから現代文明の道に入る衝動がさらに進展した。大久保、木戸、後藤、岩倉、三条、板垣、大木、それに若い役人らが政治の機構を粛清、強化することを求める間にも、人民と突然力をつけた成り上がりを啓蒙する仕事をしたのは日本の文人学士であった。というのはその人たちは初めて死を恐れずに勇気を出して自分の思想を語ったからだった。大幅な出版の自由が保障された。首都では新聞が出現した。主要な扇動者で先導者の一人、木戸は最も活気のある新聞の一つで今も続いている新聞雑誌を自ら設立した。新政府はキリスト教国の標準に等しい寛大さと、徳川家の家臣の中で文学的、或は科学的な者にとりわけ寛大に振舞い、そして政府のもとで名誉ある地位を補充する満たす人として招いた。打ち首になった政治的指導者は一人もなかった。ミカドのありがたい厚意によって許されると賢明にも皇国の全部門に和解が試みられた。伏見、若松、函館で官軍と戦ったその多くは今や復古とその論理的結果のもっとも熱心な唱道者である。榎本ですら東京の朝廷からサンクトペテルブルクの宮廷への全権大使である。敗北した大名の全部が地位や収入に復帰した。皇国の完全かつ幸福な再会がこの結果であった。学者のなかには言論と報道のもっと大きな自由が許されるときまで勤務を辞退した。

古い時代には幕府の手に掛かり汚名や死

にさえも勇敢に立ち向かって、西洋の泉で精神を養うために英語や蘭語の勉強を始めていた者がいた。書物は筆写しなければならなかった。印刷された書物は珍しかった。その後、幕府は必要に迫られて通訳や外国の芸術や科学に精通した人を雇わないわけに行かなくなって、これらの学生を選抜して海外に留学させた。内戦が起こった時、呼び戻され戦闘開始の直後、日本に着いた。戻った一人が言う。「その者たちの顔がキリスト教国の現代文明と情熱的に調和して輝いて見えた。」それから原書と翻訳の準備が開始とともに能力の高い新人によって熱心に読まれた。版を重ね、買われ、読まれ、借りられ、回読された。・これらの書物には西洋諸国の歴史が忠実に語られ・西洋の作法と習慣と信仰が説明されて弁護され・それらの源泉、思想と教育の方式、モラル、法律、政治の様式などが記述されて説明された。これら作家の中で学校教師、福沢諭吉が抜群であった。西洋思想がテキストであった。・福沢はそれに日本語の単語を着せた。さらに同国人の弱点、欠点、誤りを指摘した。そして孤立によって、外国人から受けた知識をことごとく軽蔑するといった偽りの自負によって、日本が欧米のように進歩できなかった。さらに外国人を今日に有らしめた思想の同化する以外に国を救うことは出来ないことも教えた。将来性のある有望な日本の青年なら福沢の著作を読んで、それから受ける刺激と長続きする利益を有り難く認める。復古に向かう運動の指導者の多くは「攘夷」を叫んで参加し、これらの作品を通読した後、「無意識のうちに望まず、招かれずして無意識のうちに進歩に巻き込まれ」、なぜ自分がその運動の中にいたかまったく説明が出来なかった。福沢は政治の支配下にあって事務や権力にへつらいの多い申し出をことごとく拒否した。そして今でも自分の学校の教授と翻訳に身を捧げ、貴重な骨折り仕事に生涯を使い果たした。福沢は西洋の思想と人生の通訳者であり、文明の単なる外側の艶や光沢にはわき目をしない。『西洋事情』ついての著書、小論文と随筆の叢書はムチャクチャ読まれている。

中村正直も教師だが自前の小論文を書くだけでなく相当量の英文学、ジョン・スチュアート・ミルの『自由之理』、スマイルズの『自助』、道徳と宗教に関する小品2、3冊の翻訳があって広く読まれている。中村のキリスト教と宗教の自由に関する問題の建白書は天皇と朝廷に深刻な印象を及ぼし、超神道主義者を強烈に阻止した。森、箕作、加藤、西、内田、瓜生もまた作家および翻訳者として貴重な奉仕をしてきた。筆者が皇国の進歩人たちと交わりながら4年の日本生活を送って確信したこと、それは日本語で印刷された書物を読み研究すること。他のいかなる原因或は一連の原因よりも日本人の精神を変え、現代文明の方に向かって衝動を発達させるにほかならぬことである。

過去10年間に純粋な日本文学の生産が完全に止まってしまった。内戦の前には、最近の出来事から2、3の歴史、攘夷を促す戦いの詩やチラシが2、3しか発行されていなかった。しかし内戦以来、文学活動はほとんど全く翻訳、政治的記録、信念の殉

教者であった「尊皇論者」の回顧録、そして日本人理解に適った西洋思想の表現で大いに示されてきた。

戦争は１８７０年７月に終った。報酬が分配される。政府は役所を明確に形造り、そして６世紀間、名ばかりであったすべての役所に名前をつけて現実と実力でいっそう固めた。けれども国家という船にはまだたくさん役に立たない物、長期にわたる緊張状態、機械の中の危険な摩擦量、乗組員の間の口論があり、悪い積荷の巨大な貨物があった。しかしその良船が助かるならその荷を「降ろさねばならない」ことはどんなに純粋な愛国者にも分かった。この荷下ろしは普通の方法で成し遂げられた。ある日、数百人の役人を解雇して、翌日、ミカドが望む政策に好ましい役人たちだけを再任した。

さらに言うと、国家の発展と平和は封建制度がある間は決して確保されないことが日に日に確かになった。その制度が育てた藩精神は国家統一には致命的であった。日本人が「わが国」の意味を単に自分の藩と取る限り忠誠はあっても愛国精神の存在はないであろう。行動の機は熟しているように思われた。新聞は封建制度の廃止を提唱するチラシを頻りにだした。大藩の大名で前からその備えをしていて、いまや公然とその変化を提言するのが数藩あった。小藩は変化に反対しないくらいの分別があった。四つの雄藩、薩摩、長州、土佐、肥前がその運動の先駆者であったが、天皇に建白書を出して大名の領地を私有財産と見なさず、ミカドの財産と見なすべしと論じてあった。藩の登録を天皇に戻せと要求した。これらはこの時代の外面的兆候であってその後ろに少なくとも３人が封建制度の一掃をはかる決心でいた。木戸、大久保、岩倉の３人であった。その第一歩は公卿と大名の呼び名を廃止して、共に華族と呼ぶことであった。大名は一時的に知事に任命された。これで道は平坦になった。１８７１年９月、大名を東京に呼び私生活に退くよう布告された。ほとんど例外なくこの命令は静かに受け入れられた。東京において王位の背後にいる者は、万一ミカドの命令が抵抗されたら、喜んで血を流す用意ができていたし、またそう望んでいた。この法案に敵意を持つ大名は布告を作った人たちの性格をあまりにもよく知っていて抵抗できなかった。生涯の経験で筆者の最も印象的なことのなかに福井の城の広大な座敷での光景を挙げる。その時、越前大名は２本差しの家臣３，０００人に別れを告げ、都市の全住民の涙と笑いと惜別のなかを、土地、収入、従順な家来を残して、東京で一人の私的紳士として住むために引退して行った。

日本の封建制度は約８世紀前に始まって、１８７１年内まで存続した。その最後の日々になるとそれは大黒柱ではなかった。崩壊のずっと前からそれは空の貝であり巨大な偽物であった。封建制度は指導者に能力と行動力のあるうちは生きて元気である。大名の中には個人として重要な大名は10人となかった。愛すべき取るに足らぬ人で胃と絹衣で偉大なだけであった。多くは色情、飲酒に耽る、肩書きだけの道化であった。各藩の真の力は低い地位の有能な者の手中にありその者が主人を支配した。今や日本

の現政府を構成する者である。将軍に向かって立ち上がるとひっくり返し私生活に追いやり次に主人の大名に同じことを無理強いした。天皇を支持してその名において政治を遂行する。けれどもミカドはその無為の先祖よりはるかに勝る支配者である。それでも政治の根源は同じである。１８７２年の実数で政府高官の4/5が長州、薩摩、肥前、土佐の4大藩の出身であった。１８７６年の同じ人口調査によると北方と中央の県出身役人の割合が大になるだろう。にもかかわらずこれは地域主義ではない。もっとも有能な者は生まれが低くて役所や力のある地位に登れる。生来の能力がその力にものを言わせる。内閣と省にはかっての幕府の支持者、勝、大久保一翁、榎本、それに徳川家の数人の子孫がいる。権力は取り替えられたが変わったのではなく、新しい機械を動かし、新しい仕事をすることによってその力が発揮される。

１８６８年以来、日本の実際の指導者は誰だったか、そして今は誰なのか？　大久保、木戸、岩倉、三条、後藤、勝、副島、大隈、大木、伊藤、その他大勢いる。そのうち2～3人が公家で大名はいない。ほとんどがただのサムライか列藩の臣下であった。

１８６８年の改革の目的は達成された。将軍職と封建制度はもう永久にない。皇帝ミカドは今や復帰し愛すべき皇帝になった。ここに登場の人物で24歳の青年はすでに性格的に偉大な独立心と確固心を見せていて、将来は皇帝ツアーのごとき人民の真の支配者になるだろう。神道を国家信仰として設立しようとの企画は広きにわたり不面目をあらわに失敗した。その間、古い神社は追放されて多くの新しい神社が建てられ、役所の後援や影響力によってこの昔からの信仰をうわべだけ見せかけものにする。仏教は依然として日本人の宗教である。疑いなく衰えかけているが。

この章のまとめ。・将軍はミカドの多くの家来の中で比較的低い位の1人にすぎず、歴史的には侵害者であった・「大君」という言葉は外交上の食わせ者の称号で公的には権利の影すらなかった・外国の外交官はまったく結ぶ権利のない者と条約を結んだ。幕府とは組織された侵害であった・「精神的」と「世俗的」皇帝に関するおきまりの陳述は外国の出版社の文学的創作である・封建制度はミカドの権力の退廃の上に生じた・それが国家統一の主な妨げになった。衝撃が来る前から滅亡に備えていた・日本史のなかでミカドその人と玉座への尊敬が最強の国家の特徴であり、最も強力な政治力であった・幕府は自らの目的のためミカドの神聖であることを誇張した・日本人は感じやすく、なんでも外国の援助や適応が自分らを富強に見せる傾向があるものなら進んでそれを利用する・にもかかわらず国の特徴、誇り、感じ、宗教、それに対等―世界の国々よりも優勢でなくても―を守ろうとする強い傾向がある・日本のこの8年の出来事の正しい説明はこの傾向と国内の歴史に求められるべきだ・将軍、幕府、おそらく封建制度は外国人の日本上陸がなかったとしても倒れたであろう・近代文明に向かっての動きは内から起こった。単に外国の衝撃や圧力

の結果でなかった・外国の啓蒙と教育だけでその動きに成功を確信させたが、それを自国の学生、政治家、ひたすら国を愛する者らによって始められ且つ実行された。

１８６８年の革命後、新政府を強力な仕事が待っていた。時代が生んだ病を治すことがそれだ。封建制度と地域主義の根をその弊害とともに断ち切ること。日本に新しい国家的独立を与えること。日本の社会組織を変えること。日本の血管に新しい血を注入すること。隠者の国を光の急な流入で半ば見えなくして、裕福で、力強く、攻撃的なキリスト教国と競う国にすることであった。それは国の復活、それとも滅亡にかかわる問題であった。再び生れて歴史に２度立ち会うことに思われた。

このような仕事にはいかに超能力が必要であったか。いかに国家統一、協議の調和、非利己的愛国主義が必要であったか。仲間の上に聳え立つ中心人物が、その強い知性と並ぶものなき機転を利かせて、いかに頼朝、太閤、家康自ら、いや、みんなでも実行できそうもないことを成し遂げるか。本土には鈍感で保守的な農民がいて、その背後に無知、迷信、僧侶の術策、政治的敵意があった。自分の土の上で日本人は侵略的外国人と直面した。外国人はドル、セント、交易の現状を通して日本のあらゆる問題を研究した。またその外交官は頻繁にシャイロックの金貸し主義を組織化した。日本の外ではアジヤの諸国が軽蔑、妬み、驚愕の目で、メンバーの１人がウラル・アルタイ語族の思想、方針、文明から離脱するのを見た。卑屈な怒りの中国とあからさまな憤りの朝鮮は日本を「外国の悪魔」にかしずいたと嘲った。

ようやく日本国が熱心な同時に能力を結集した使節団によって世界にお目見えすることになった。それはけち臭い役人や地方の貴人の団体とは違っていた。これらの人は足先にキス、船首像（名ばかりの指導者）や囮の鳩（内通者）の演技、外国人に脱出の依頼、砲艦を購買、雇用人の採用といったことがまかり通った。国政を君臨の祭司、記念すべき先祖、最高の地位と血筋の貴人が、４人の閣僚を伴い、大日本と条約の15カ国の議会訪問に発った。岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、勝安房の面々であった。政府の各部門を代表する事務官が付いて外国文明の形式と起源についての研究報告に遣わされた。一行は１８７２年２月29日、ワシントンに着いた。史上初めてミカドの署名のある手紙がアジヤの外で公開された。３月４日、古代大和の衣装を着た大使から手紙は合衆国大統領に贈られた。森有礼が通訳した。「自由共和国の最初の大統領」とエタを市民にまで高めた人々が向き合って立ち兄弟の契りを結んだ。26回目の１００年祭で１２３代に君臨する皇帝が１国の市民支配者に挨拶を送った。その国の１００年に１回咲くアロエ（竜舌蘭）はまだ咲かなかった。３月６日、一行は国会の床の上で歓迎された。この日、世界歴史の舞台に日本が正式に登場した。（以上）

（文中の傍線の部分は原文がイタリック体である）

付記

それにしてもこの論文を平たく邦文にし、

維新外論と銘うって世に出した英学者牟田豊については、１８５０年生まれで没年が不明の鹿島藩士。長崎の致遠館（佐賀藩長崎校）でフルベッキから英語を学ぶ。１８７０年、藩命により大学南校入学、フルベッキやグリフィスの教授を受けた。１８７２年、藩主鍋島直彬の渡米に随行してワシントン滞在。翌年、『米政撮用』を刊行した。この後の『維新外論』の出版は先輩大隈重信の政治力によるところ大であるとみえる。その点、福井藩でだれか牟田　豊に相応しい英学者はいなかったか。薩長土肥の若き群像に見るお雇い外国人から英学を吸収するパワーが福井藩の若者には見あたらない！　福井との違い！

閑話休題。岩倉使節団はグリフィスにとっていかに偉大な出来事に見えたことか。日本が世界の歴史の舞台に登場するとの著者の希望が“The Mikado's Empire”の第2部の終章を飾っていた。歴史から学ぶとき、振り出しに戻ることを心掛けたい。忘れてならぬことは先述したグリフィスのフルベッキ伝、“Verbeck of Japan”の13章‘The Great Embassy to Christendom’であり、さらにこの文中で指摘のある“The Japanese in America” Charles Lanman,（1872）にはいっているPart.1 ‘The Japanese Embassy’である。岩倉使節団について詳しい研究書が多くあるが、そのどれにも上記の貴重な論文がほとんど無視されているのは残念である。

（前編）でお断りしたが、訳文は‘The Mikado's Empire”第一部第28章からの全訳で、その原文とは一致しない箇所がある。また、前者に付く注及び後者に必要な注を割愛したが、この訳文を明治維新史の資料として正面から取り組まれるようお勧めする。その上に既存の文献を複眼的に働かせてみて、もう一度訳文に返る。するといくら想像力を働かせても浮かぶ瀬もない現実に訳文を通して空間的時間的に少しでもたち帰れるだろう。

日本人のウソをつく癖は幕府自体が巨大な欺瞞の塊になっていたからだと書く。また生涯における最大の印象は藩知事の告別にあたって庶民の見せる涙、笑顔、心のこもった挨拶のことばであった。もう一つあげるなら近代文明への確実な成功の秘密は日本人学者、政治家、純真な愛国者によるものであるとも。かくして興味深い事実が歴史を彩る。